

浮舟の出現

本 多 弘 子

序

「宇治十帖」は「世にかずまえられ給はぬ古宮」としての八宮の登場にはじまり、その姫君二人をめぐって物語は展開されようとする。しかし「総角」の巻に至って女主人公である姉の大君は既にこの世を去り、そこで物語は大きく転回される。そしてそこに作者の要求として浮舟という女性が出現させられてくる。大君が若くして消えゆくように、この世を去る話の後に、突然に浮舟の身の上語りはじめられるに至る物語の展開には、作者の創作意識の問題として非常に興味あるものを含んでいる。

浮舟は、姉君達とは母を異にした八宮の三番目の娘として登場する。しかしながら、読者は既に、「橋姫」の巻に於て八宮の俗聖の生活態度に接している筈である。北の方の死後、「例の人ざまなる心ばへなど戯はなふにても思し出で給はざ

りけ」る八宮に、浮舟という女子が中将の君を母として生れたのである。私はここに素朴な疑問を感じる。恐らくこの矛盾は、作者が思わぬ所で出してしまった構成上の足ではないであろうか。そうだと断定するならば、「宇治十帖」に筆をそめはじめた時の作者には、浮舟の構想はまだ生れていなかったと推定できる。

仮に、この矛盾以上に浮舟誕生の過程というのが、人間の真実として納得できるとした場合に於ても結論は変らないと思う。というのは、八宮の人間像を考えてみるに、八宮は世俗に身をおきながら人並みはずれて道心が深く、俗聖と呼ばれる程であったこと、この一途な志向性を持つ人物設定は全く新しいものである。そしてその志向性に基づく八宮の人柄の鮮明な印象に比して、「宿木」の巻で語られる浮舟誕生のいきさつは、いかにもあわただしく語られて、真実味に乏しいと思われる。八宮の性格を考えると、八宮の俗聖の

生活態度を前後統合してみなければ、私には納得がゆかない。八宮の人間像は、虚構された物語人物として、そうした裏づけに支えられるのである。従って浮舟の出現は、それまで八宮に対して抱いていた印象が裏切られたという瞬間の素朴な途惑いを私は覚えざるを得ないのである。更に、浮舟があまりにも突然に登場してくることを考え合せてみれば、「宇治十帖」の最初の構想上に浮舟の物語が組み入れられていなかったと推しはかることは可能であろう。

それでは浮舟物語の構想は、どのようにして作者の創作意識に宿されてきたのであろうか。浮舟の出現はいかなる作者の要求に基づいているのであろうか。私は、先ず、浮舟物語の予想されなかったところの「宇治十帖」最初の部分に返ってみたいと思う。その部分を辿ってみることにによって浮舟の出現が導き出せるのではないかと考えられるからである。

一、大君の物語

「宇治十帖」に筆を進めた作者の最初の執筆意欲は、大君という女性を描くことにあったと思われる。「橋姫」の巻は世から見放されて不遇な八宮の登場にはじまるが、この八宮の登場から薫の出現に及ぶ物語の構想の周到な条件設定には目を見張るものがある。特に、八宮と薫の人物設定において新しい物語人物としての特性が見られるという点が、先ず読者の興味を引く。その新しい固有な人間像の設定を介して大君という女性は物語上に引出されてくる。即ち、大君は八宮の

娘として八宮の強い影響を受けて出現し、更に薫の思慕をかきたてる女性として次第にその美しい輪郭を明らかにしていくのである。そこで先ず、主人公大君の本質を把握する手段として、八宮の性情とその生活環境を追ってみる必要がある。

先に述べた通り、八宮は世から見放されて、現実的には不遇な人物として「宇治十帖」のはじめに叙述される。八宮は桐壺院の第八皇子で光源氏とは腹違いの兄弟でありながら、光源氏方の栄華の波にはずれた為、孤独な生涯を余儀なくされる。まもなくお互いに慰め合って生きてきたところの北の方が二人目の姫君を生んでこの世を去る。とり残された八宮は、姫君達を慈みながら優婆塞の生活に入ってゆく。やがて邸が火災で焼失し、不幸続きの一家は、京を捨て宇治の山荘に移り住むことになる。

さて、宇治で晩年を送る八宮はひたすら仏道の修業に専念する。その合い間には琴の合奏などをして姫君たちの相手になり、そうすることによって宮自身の気分は癒されもした。八宮には子を持つ親としての世俗的な努力は、もとより出来得ることではなかった。姫君たちに対する八宮の愛情は、宿命の悲しい不憫さの中に彼女達を眺めやるその姿勢の上に、美しい心情として表現されている。作者は八宮をして既に世を諦めきった現実的敗者の認識を持たせ、その故に苦しい精神の拠り所として浄土の世界を考えるとというような志向性を与えて、一人の皇族を取り上げる。その娘として出現する大君

は、そうした父の境遇と性情の影響を、女性の身なればこそ、より極限的にその性格上に引き受けていると推察出来よう。

やがて薫の君が、仏道に励む八宮を慕って物語上に姿を現わしてくる。薫と八宮の間は必然的なりゆきとして男同志の友情へと発展する。二人の固い親交は、お互いの仏道の志向において結ばれたものである。若い青年である薫がこのような浄土希求の志をもって登場してくることは、八宮のそれ以上に重要である。薫の道心は、浄土希求の志はそれとして、一方では現実において人生を直情的におし進む事のできない、途惑いや不安感、反省的性格をもはらんでいる事を、特に重視しなければならない。つまり、薫の道心は薫の性格を反映しているのである。むしろ薫の性格は薫の道心と一体である。このような性格を有する薫の心情においてこそ、清水好子氏の論ぜられた「薫の優しさ」が読者の感動をさそうものとして導き出せるのではなからうか〔文学〕昭和三十二年二月所載「薫創造」による）。薫の右の様な性格は、物語を通じて貫かれているところの、愛する女性に対して積極的行動を取れないという薫の態度を根底において支えているものであるが、氏はこの点に關して「概念的なものを超えた、人が生ま身なものにふれた敬虔さ」である、と、薫の「よき」性格を説明されている。そうしてこのよき人薫は、結婚というような世俗的営みを自分から切り離そうとする。その精神を強く支えているのが、彼の道心である。

薫のかくの如き精神は何に基づいているものであろうか。基因の一つとして薫の出生の秘密があげられると思う。それは源氏物語第二部と呼ばれている「若菜」上・下の巻にさかのぼらねばならない。そこに展開される悲劇を薫はその生に引き継がせられたのである。「宇治十帖」の中では「橋姫」の巻において、老尼弁の口を借りて報告される。八宮の山荘で弁から秘密の父を知らされた薫は、そのやるせない気持を、一人、孤独な心にもてあまして、母入道の宮を訪れる。しかし自己の悶えるばかりの苦しみ比して、母は「いとな心もなくわかやかなるさま」をして、薫が訪れたのを知ると、読んでいた経を恥かしげに隠す様が描かれる。余りにも幼い母の態度にその性情の貧しさを汲み取った薫は、深い悲しみと共にいよいよ内に閉ざされる。この、薫が母を訪れた「橋姫」の巻の場面は、薫の人間像をよく語っている部分として重要である。薫の悲しみは、自己の生につながる事件それ自体であるよりも、その事件に導き出された自己の意識——しかも孤独な心——の内部に、他人から理解されぬ奥深い悲しみとして沈潜していたのである。それは母子の間でさえ通じ合えぬものであった。世俗的な幸せに背を向けようとする薫の生活態度は、ここにその原因を見出し得るであろう。

さて薫が八宮を宇治に訪れはじめてから、三年の歳月が流れたと叙された後に、急に美しい描写の文章があらわれて、印象的な、薫の姫君垣見の場面がくりひろげられる。この時、姫君達の姿は薫の目にはっきりと映ってしまう。姫君達

の具体的印象は、薫の垣見を通してはじめて読者にも与えられる。所がら、琴と琵琶をもてあそぶ姉妹の美しい姿はまるで「昔物語」の中の場合に接しているかに思え、薫は夢のような心地になる。作者はこの部分で、さすがの薫も「心移りぬべし」と述べている。

しかし、孤独な暗い心に深い悩みを宿す薫の、女性を求める心理は、お互いの孤独を癒す理解者としての交りを望むところに根ざしていた。そういう薫の望みに応えるにふさわしい女性として造型されていたのが、姉の大君であった。

大君と中君は、初めからその性格、容貌を分けて描かれる。中君は容貌が愛らしく大様で遠慮深そうな様子をしていてと描写されているのに対して、大君は気だてが静かで落着きがあり物腰も奥ゆかしく上品で、更に物事の分別があるという点で中君とは異っている。このような大君の人間像は薫のそれとびつたりくるものである。薫は現実を厭い離れることを自己の生の目的と志し、その為の宇治訪問であると心がけながら、いつしか大君を求める心の募るのをさしとめることができなくなってくる。ここに、思慕する男性、薫の要求によって、大君は物語の中央にひき出されてきたわけである。

しかし薫の幾度かの熱心な接近に対して、それに応待する大君の態度には常に釈然としないものが感じられる。結論的にそれは薫の接近を拒絶する態度である。作者はこの大君に様々な影響を与えたと思われる父の八宮を、「椎本」の巻で死

なせ、その事によって大君を自分一人の判断において薫に对应させようとする。大君が頼りにしていた父は、世間から捨てられて不遇な皇族である。しかしその父さえ今はなく、まして山深い片田舎に世俗的交りを絶って育てられた境遇を思うにつけ、大君は自分達姉妹の生命力の弱さを認識せざるを得ない。大君はしばしば薫を前にして「はづかし」と我身をかえりみる。この時大君は既に二十六才にもなっていて、も早、青春と呼ぶべき年頃ではない。幼少の時から人遠き山里に住まい、又父なき今は心からうちとける事の出来ぬ老女たちの中にあつて、彼女達の教える一般の女としての生き方をかたくなに拒否しつつ「あやしくもありける身かな」（総角）と我に戻れば、さすがに自分がいとおしくなるのである。姉妹を取り巻く侍女達は姉妹の信頼を寄せるべき人々ではなかった。しかも彼女達は年老いてその性情は卑しい。「たのもしき人なくて世を過す身の心憂」さは、殊に姉の大君にとっては大重大であるに違いなかった。更に女性としての自己を見放された境遇の中に見い出す時、老女たちには理解すべくもない大きな悲しみが大君を襲うのである。そういう自意識の中に悩みを宿す大君の心情の一例として、鏡に我身を写して「われもやうやう盛過ぎぬ身」と嘆く場面（総角）は真実味溢れて印象的である。作者は以上のような大君の心情表現によって、大君をして「はづかしげ」なる薫を感知せしめ、大君の意識内において薫の姿を遠ざけさせるのである。

しかしながら、一方において大君は、薫の類いまれな誠実

さに心を惹き寄せられる。後見人のない姉妹にとって、薫は如何に大切な存在となり得ているか。それは薫を避けようとする大君も承知している事である。大君は薫が自分達姉妹から冷淡に離れていくことを、人知れず、怖れている。そういう矛盾した気持が、大君に、薫と中君との結婚を思いめぐらさせる。大切な人である薫に対し、「さま容貌もさかりにあたらしげなる」中君を縁づけ、自らは中君の後見人として生涯をかけようというのである。

然るにここにおいて作者は、中君の相手として薫の親友勾宮を実に巧妙に引出してくる。かねてから勾宮は、薫の話す宇治の姫君に興味を抱いていた。必然的に、勾宮の手紙には中君が応ずることになる。やがて薫の手引きによって勾宮と中君の結婚が成立する。これは薫の求める女性が大君以外の女性であってはならぬ何よりの証拠であろう。そして薫の思慕は自己の道心との矛盾を超えて大君に迫るまでに高まるのであるが、大君は深い嘆息と共に何やら定められたかのように薫から身を退こうとする。そこには捕えようのない大君のたゆたうがある。

薫と大君の対面場面はこのような薫を受け入れぬ大君の体勢をもって貫かれるが、この心理の動因としては何が考えられるであろう。対面する大君の眼前には、常に、はづかしうめ、たゞ存在の薫があった。又、八宮の「ただかう人に違ひたる契り異なる身と思しなしてここに世をつくしてむ、と思ひとり給へ」（椎本）と語られた遺言も大君を強く支配して

いた。しかし、これらは大君が薫を拒もうとする根拠としてはいづれも真実味において軽いもののように私には感ぜられる。何故なら、そのような根拠の以前において、男性の思慕を拒絶しようとする思想が大君に存していると感ぜられるからである。即ち、大君の薫を拒む態度は、八宮の遺言や、めでたき存在の薫に対する自意識といった理由から結果的に導き出されてきたものではない。それ以前の問題として、既に大君に前提として備えつけられていたものである。

大君の人間像はひとえにその環境の規制によって形造られていると思われる。それは八宮の境遇と志向性に基づく。八宮と大君は共通して一つの精神的志向を有する。それは薫にも共通するものである。その精神的志向は、何に基づいているかをここで繰り返して述べれば、現実的不遇を余儀なくされた者の孤独な自己認識であろう。例えば、大君という人間像において、彼女の中に生きるべき意欲を見出すのは難かしい。大君はその生に於て何を産み出すことができるであろうか。彼女は唯、八宮の境遇をその死後も身に負って受動的に歲月を送っているにすぎない。

生きる意欲は既に、時の流れに身をまかせることに置き代えられ、そうしてその悲しみを自己の意識のうちにはつきり捕えざるを得ない、業とも言ふべき性格を有する人間において、その苦痛の中に、あの哀傷を含んだ嘆息が内から出てくるのである。そうした状況に身を置きながらも、ぎりぎりの生命肯定の姿勢が彼等をして浄土希求の念を呼びまさせ、

宗教的志向をもつ人間たらしめているものであろう。薫や八宮の人物設定の上にあらわれている特殊な要素も、作者の以上のような人間追求の態度の反映であるに違いなかった。

大君は、そのような特殊な志向性を備えた人物設定によって、それらに導き出されて造型されていた。即ち大君は優婆塞の生活を続ける父の傍に育ち、その影響を受け、薫の孤独を癒すべき思慕の対象として作者の創作意識にあらわれた女性である。

作者が大君の上に描こうとしたものは、こうした孤独の中に、宗教的志向を持ちながらも、果たして如何なる人間関係を保ち得るか、という点にあったと思われる。作者はそれを受動的な形でひき受ける一人の女性の身の上に、愛情のあり方として、具体的には結婚の問題として追求しようとしたものであろう。この主題を負うべく作者によって取り上げられた大君は、終始、薫を拒もうとする態度をもって描かれる。しかし拒もうとする意志の裏に、拒むべき薫を、きっぱり遮断することのできぬ矛盾した心情が大君にあった。その心情の中にたゆたいながら、それでも尚終極的には、拒否せねばならぬ姿勢を持たされて、大君は描かれてゆくのである。

しかし、大君のそうした心情は読者にとって捕えがたい。いかに父八宮に基づく精神性を宿していたにしても、大君の現実拒否の態度にはその具体的根拠に乏しい。又いかに大君が中君に対する姉としての責任を感じていたにしても、死の原因としては余りにも軽く、大君の生命は余りにもはかない

ものとしてしか語られていない。

大君が世俗的な幸せを拒む意志は、そうすべく定められたかのように最初から大君に根強く居坐っているものである。従ってそれは大君の意志によってさえ如何ともしがたく大君という女性には持ちこたえられぬものではなかったのではなからうか。大君が死へと急がねばならなかった一つの原因はこの点にもあるのではなからうか。私は作者の大君物語に目ろんだ主題は大君という女性には重すぎたように感ぜられてならないのである。

即ち大君は作者の熱心な執筆意欲によって用意周到な構成のもとに創造されようとはしたが、作者の主題性があまりに強くおおい過ぎた為に、物語人物として充分にその主題をこなし切れてない、観念的人物となってしまうと考えられるのである。八宮の大君に及んだ規制は、実は作者の規制でもあったのである。従って大君という人間像は物語人物として描き切れていないと言っているであろう。大君物語は、孤独な作者の人間追求の姿勢を考え合わせてみた時、初めて理解されるものである。大君という女性の人間像もそうすることによって読者にはつきりと捕えられるのである。

二、中君の物語

大君死後の物語は、故人を思って愁いに沈む中君の描写をもって続けられる。中君はこの時既に勾宮の妻である。ここでの中君は、「いときかりににほひ多くおはする人のさまざ

まの御物おもひにすこしうち面瘦せ給へる、いとあてになまめかしきけしきまさりて」(早蕨)と描写されてくる。中君はそれまで、「なつかしくらうたげ」であると、繰り返し説明されてきていた。ところが大君の死後になると、この要素に加えて中君は物思いの姿勢を宿してくるのである。この事は作者によつていちはやく「昔人にもおぼえ給えり」と説明される。ここに中君は、大君の影を深く宿した女性として語られるわけである。

一方自ら中君の後見役をかつて出た薫は心なしか奥ゆかしさのまさった中君を間近に見て心を動かされる。「うち忘れてはふとそれかと覚ゆるまで通ひ給へるを」と、作者は、薫の心理の中に、大君に似てきた中君の変化を描えさせる。中君が大君の影を宿して見えるのは、恋人を失った薫の心情に於てこそ重大なのだ。この中君の描写には作者の意識的な筆の運びが感ぜられる。中君が大君に代つて徐々に物語の中心人物としての重さを備えてくる事と並行して、それは増々強く感ぜられる。つまり作者は、中君を物語の中心人物として意識的に取り上げようとしているのである。この時、作者の中には、新しい物語構想が芽ばえていたと思われる。それは中君をめぐる展開されようとしていたのである。それはいかなる内容を持つものであるか。本文に添つて見てゆきたいと思う。

やがて中君は匂宮の意向によつて京に移される。そして、中君の幸福な結婚生活が続けられるかに見えたが、まもなく

夕霧右大臣の姫六の君が匂宮の正妻の地位につくという事件が起る。富の面からも権勢の面からも華やかな六の君の存在に中君ははじめて世の交りの辛さを思い知らされる。中君にとつて匂宮との結婚は、匂宮の熱情的な愛の表現に支えられて実現したものであった。又それを信頼しての京への移住であつた筈である。しかし、宮の六の君との結婚は中君のそうした信頼を崩壊させるべき強さを持つていた。従つてこれは結婚生活の危機を中君に感じさせるものであった。当時の社会形態から考えても、この種の危機がいかに女性の身を大きくゆさぶるものであるかは容易に想像される。

現実的力量的の薄れた境遇に育つた中君は、貴公子の妻としての実力に乏しい我身をかえりみて、父の遺言や姉の思わくに背いて宇治の山莊を離れてしまつた事を秘かに後悔する。そうして再び宇治に帰りたい旨を薫に消息するのである。後見者としての薫はこの中君の境遇に深い同情と責任を感じ、同時に中君を匂宮にゆづつた軽率さを後悔する気持ちに襲われる。薫のこの感情は次第に中君を慕う心に変つていった。大君を失つた薫の孤愁の心に、中君はいよいよ亡き大君の面影をもつて映ってくるのである。

作者は前に、大君の心の内を試してみるかのように大君に向つて薫を当らせたと同様の手法を用いて、今度は中君に対して薫を当らせてみる。ある夕方、中君の消息を受けた薫は中君を訪れて対面する。そこに見る中君は以前に比べて「こよなくねびまさ」つていた。大君生前の「昔」を思い出さず

にはおれない薫の、捕えられぬ者への限りなき思慕の念は、その時、亡き人の影を宿す現実上の中君を求める行動に移されていった。しかし薫は「よろづに思ひ返して」自ら退く。この場面の薫の反省心理の動きは重要である。薫が中君の前から退くのは「なやましげに聞きわたる御心地はことわりなりけり、いとはづかしと思したりつる腰のしるしに多くは心ぐるしく覚えてやみぬるかな、例のをこがましの心や」（宿木）と描写されているように、中君が妊っていることを知った時の衝撃によるのである。ここにも薫のよき性格はあらわれていて、既にこの点に關しては清水氏（前出）が言い及んでおられるところである。

このようにして作者は、薫を中君から一旦は退けさせてみるが、物語は次の場面で、やはり、中君への恋情の消えやらぬ薫の心理描写をもって展開される。更にその次には、久しぶりに中君を訪れた匂宮の描写が続く。氣づまりな六の君との生活をしてきた宮は、中君の「いとらうたげにうつくしささま」を見て「よろづのこと心やすくなつかしく」思われ、改めて中君に強く惹かれる。そして中君が薫に慣れ親しんでいる様子に匂宮は嫉妬と疑いの目をそそぐのである。

この、中君をめぐる薫と匂宮の心情は、ある悲劇を、中君の身の上に予想させるものである。作者が抱いていた中君をめぐる新しい構想は、いよいよ具体的様相を呈してきたと見るべきであろう。

中君はまさに激しい宿世に襲われようとしている。ところ

が作者は恋情さめやらぬ薫の前に、突然に中君の異母妹の浮舟を紹介するのである。そうして、中君に予想された宿世の嵐は、突然に浮舟を登場させる事によって中君からは回避される。浮舟紹介後の「宿木」の巻の後半に至ると、中君は早くも物語世界から姿を消してゆき、代って浮舟が次第に中心人物として語られてくるのである。

後に「浮舟」の巻で展開されるところの浮舟をめぐる悲劇は、はじめ中君に予想されたものである。何故に中君はここで浮舟に代えられねばならなかったのであろう。浮舟が中君の代りに出現しなくても物語はむしろ自然に運ばれた筈である。

右の疑問に答えるものとして私は、作者が中君の性格として書添きえた次の一言を上げようと思う。

「さるはこの君しもぞらうらうじくかどある方^{かた}のにほひはまさり給へる」（総角）

中君は大君とは異って、現実^{じゆんじつ}に身を処し得る力を備えた女性として登場させられていたのである。大君が現実不信の思想によって、薫には捕えられぬ女性として設定されていたように、中君も又、右のような現実的幸せを求めてゆく女性として、匂宮の妻の位置にあった為に、薫には捕えられぬ女性であった。

以上のようにして中君は物語の主要人物群からはずされて。その後^{のち}に続く物語は、浮舟を主人公に新しい主題をめぐる展開されてゆく。そこに描かれる浮舟という女性が、中

君以上にその悲劇を演ずる人物として、より必然的な要素を含んで創造されていたということであれば、女主人公が中君から浮舟に移された理由がより明らかにされるであろう。しかしここでは、中君の性格が現実的幸福を受け入れる女性として設定されていたという、一つの理由をあげるにとどめる他はない。

三、浮舟の出現に関して

浮舟の出現は、薫の心理に、ある変化をもたらすことになる。

大君の「人形」^{ひとがた}を造って拝したいまでに高まっていた薫の大君追慕の念は、その「形見」としての中君を求めてやまなかった。しかし、その中君をも得られず、薫はやるせない寂寥感におおわれていた。そこに「昔人の御けはひに通ひた」る浮舟の存在が中君によって薫に知らされたのである。薫はすぐに「似たりとのたまふゆかりに耳とまりて」（宿木）と心を動かす。浮舟は、大君に似た容貌をもつ、大君の「ゆかり」として薫の心に意識されたのである。薫の浮舟への関心は、この点に基づく。

やがて、浮舟の素性が、例によって、弁の尼から語られ、その後に薫の浮舟垣見の場面が描かれる。そこにおいて浮舟は、実際に、大君そっくりの「あてなる」品位をもって薫に印象づけられる。浮舟は大君類似の容貌を持つが故に、この要素を発端として薫によってひき出される。従って浮舟の出

現は、薫の大君憧憬の心がもたらしたと考えられる。それは大君が薫の手の届かぬ所にあるということ——大君が既に死んでしまっているということ——に基づいている。「宇治十帖」の構想を支える最も大きな要素は、大君を慕う薫の変らぬ姿勢である。このような薫の姿勢が、浮舟に大君の「ゆかり」としての出現を要求したのである。

しかしながら、大君の「ゆかり」である浮舟は、現実上では中君の身代りであった。中君をめぐる薫と匂宮の物語構想が、作者の中に出来上っている事は既に明らかである。けれども中君は、匂宮の妻として薫から離れるべき辛い人として造型されていた。この辛い人中君をして、危機に陥入れるべき悲劇を作者の目が捕えてしまった時、突然に浮舟の出現が要求せられたのである。

以上のように浮舟は、実質的には中君の身代りとして出現しながら、一方において、薫の大君憧憬の心に応えるべき大君の身代りとしても要求されている。浮舟の出現には、薫の要求として二つの意味が重ね合わされているのである。

このような二様の意味をもって出現した浮舟は、ひとまず中君の身代りとして、中君に予想された主題を課せられて語られることになる。中君から浮舟へと移行された悲劇は、初めの大君物語に追求されようとした主題とは全く別にして、大君の死後、新たに作者によって取りあげられた主題に基づく。作者は大君物語の次に中君の物語を展開しようとする時、そこで大きな主題の転換を行っている。従って浮舟の出

現以前において、二種類の主題が、それぞれに大君と中君の物語の筋を構成していたのである。これらの筋書きが、全て薫の大君憧憬の姿勢に支えられていることを思うとき、この薫の飽くなき執心は、同時に作者の創作態度にも宿されたものであらうと考えられる。そして、この作者の創作態度こそが、浮舟の出現に、二様の意味を要求させたのではなからうか。先に述べた浮舟の出現に伴なう二様の意味は、浮舟出現以前における作者の二つの主題追求の姿勢が、依然として糸を引いていることを示しているのではないであらうか。

ところで、作者が大君物語に托した主題は、充分なる具體的根拠に基づいて追求されず、観念的なものに終っていた。その結果として大君は早くに死なされ、そこには必然性に乏しい大君の死への印象が残されていた。浮舟の出現部分において、作者が大君の「ゆかり」としての期待を浮舟に寄せたのは、作者の大君物語からの主題追求の姿勢が、まだ消えずに

残っていたからである。この作者の姿勢が薫の態度に及び、大君のよすがを求めて、薫に中君や浮舟を追わせたのである。従って、浮舟の出現が中君の身代りとして要求された作者の創作意識の裏に、大君の身代りとしての要望が、作者にも又抱かれていたと見られる。作者が浮舟に大君類似の容貌を必要としたのは、浮舟出現のきっかけを誘導するというような軽いものではなく、より積極的な作者の、浮舟物語への期待があつたであらう。

浮舟は、大君の「ゆかり」としての期待と中君の身代りとしての要請が二つ重ねられて出現する。この二つのものは、恐らく、作者が大君に目ろんだ愛情の問題と、中君の生に予想した宿世の問題との、二つの主題の尾を引いているものであらう。それが作者の浮舟物語執筆の意欲を強く支えていたと思われるのである。